

成田空港周辺におけるインバウンド観光の地域特性

－ 宿泊施設の経営と外国人旅行者行動の分析を通じて－

鈴木富之・中村文宣・池田真利子・福田 綾
・長坂幸俊・山下清海

キーワード：インバウンド観光，宿泊産業，外国人旅行者，フライトクルー，成田空港

I 序論

グローバル化が進展するとともに、国際的な人の移動が活発化し、国際観光流動の規模が拡大しており、日本においてもインバウンド観光に注目が集まるようになった。日本政府観光局（JNTO）によると、2008年の訪日外国人旅行者は835万人であり、ビジット・ジャパン・キャンペーン（以下、VJC）開始前（2002年）の523万人と比べ1.5倍以上に急増している。また、日本では地方都市の衰退や国内観光の停滞、宿泊施設の過剰供給といった問題に対して、地域活性化の起爆剤として訪日旅行者の誘致が積極的に行われている（千，2001）。そのため、今後中国人をはじめとした訪日外国人旅行者の増加が見込まれており（千，1999；鈴木，2002；清水，2007；劉，2007）、観光関連産業は重要な産業の一つになると考えられる。

千（2001）と金（2009a）は日本における観光政策についてまとめている。それらによると、日本では、第二次世界大戦直後における外貨獲得の手段として、ホテル・旅館の整備、国際観光文化都市の指定といったインバウンド観光の振興が進められた。しかしながら、1970年開始の大阪万博によって訪日外国人旅行者が増加したものの（トラベルマネジメント，2001；岐部・原，2006）、1960年代末の外貨保有高の増加、海外旅行の自由化な

どを背景として日本人のアウトバウンド観光に注目が集まるようになった。さらに、運輸省は1987年に「海外旅行倍増計画（Ten Million 計画）」を推し進めた。これによって、貿易収支の大幅黒字を減らすことや、国際収支のバランスを改善するための手段として、日本人のアウトバウンド観光が奨励された。その結果として、日本におけるアウトバウンドとインバウンドの不均衡状態が続いている。インバウンド観光が本格的に注目を集めたのは、1996年の「訪日観光交流倍増計画」（ウェルカムプラン21）の提出からである。これによって、訪日旅行に関するPRや、ウェルカムカードや割引運賃による旅行費用の低廉化、観光情報の提供による利便性の向上が図られた（進藤1999）。また、1997年には「外客誘致法」、2000年には「新訪日観光交流倍増計画」（新ウェルカムプラン21）が策定された。さらに、2002年には「グローバル観光戦略」が策定され、2003年に国土交通省が中心となってVJCが展開されるようになった。これは2010年に訪日外国人旅行者を年間1,000万人にすることを目標に掲げており、官民一体となって推進されている。さらに、2006年に観光立国推進基本法の制定、2008年10月1日に観光庁の設置が行われた。このような状況下、近年訪日外国人旅行者を受け入れる態勢が官民一体となって整えられてきた。

しかしながら、清水・祖田（2005）は、各観光

関連機関による訪日外国人旅行者の位置づけが一樣ではなく、彼らの受け入れ態勢に差異が生じることを指摘している。清水・祖田の北海道における外国人旅行者の受け入れに関する報告では、行政・旅行会社・バス会社が外国人旅行者の受け入れに積極的であるのに対し、宿泊施設においては彼らの受け入れに消極的であることが示されている。とくに、温泉地の宿泊施設はあくまでも日本人の集客を第一に考えており、外国人旅行者をオフシーズン対策や稼働率改善の「埋め合わせのような存在」としてみている。また、訪日韓国人旅行者の訪問地を分析した堀川（2000）によると、彼らは宿泊費用の節約のため東京・箱根といった観光都市を避けて、地方都市の宿泊施設に宿泊することが指摘されている。一方、旅行会社における中国人の受け入れについて分析した清水（2007）は、中国人の観光旅行の取り扱いを中止した旅行会社や、観光旅行よりも商用旅行を重視する旅行会社のみられたことを指摘しており、その要因として訪日観光ツアーの急激な価格低下による価格競争の回避、商用観光旅行の融通性の高さ、代金回収の問題を挙げている。このように、外国人旅行者の受け入れに際して観光関連産業のさまざまな戦略がみてとれる。

地理学におけるインバウンド観光に関する研究としては、以下が挙げられる。訪日中国人旅行者の行動特性について論じた金（2009b）は、彼らの観光行動の特徴として、東京と大阪を中心とした大都市圏での買物および名所見物と、そこから派生した大都市圏内の温泉や火山、景勝地を周遊する観光を挙げている。これは、中国人旅行者の訪日観光旅行には厳しい制限が存在するため、1回の旅行で複数の知名度の高い観光地を訪問することによって、多様な観光体験が求められている。また、韓国人と台湾人訪日観光は規制緩和がなされており、中国人に比べ多様な観光行動がみられることを指摘した。杜・劉（2006）は、東京を訪問した中国人を対象として、観光資源の認知に関する空間分析を行い、ツアー日数の増加に伴って訪問地が増加することや、ショッピング施

設への志向の高さを指摘した。長野県におけるインバウンド観光に着目した金（2009a）は、旅行者の出身国と、訪問地および観光行動に関連性があることを明らかにした。これは、台湾人旅行者が桜開花や紅葉の季節などの自然景観と温泉に関心を持っているのに対し、オーストラリア人と韓国人はスノースポーツへの志向性が高く、長野オリンピックのアルペンスキー会場で有名になった白馬村を訪問する傾向があることを述べた事例である。また山口（2008）は、外国人ツアー客の来日経験と満足度の関係を明らかにし、初来日が多い中国人の満足度の高さと、来日経験者が多い韓国人の満足度の低さを示した。他分野では、観光地スケールで訪日外国人旅行者の特徴を論じた小松・中山（2007）が、奈良市を来訪する外国人旅行者の実態を分析し、アジア系団体旅行者と欧米系個人旅行者では、奈良訪問の契機や奈良観光の情報源、交通手段などに差異が生じることを示した。

このように、日本におけるインバウンド観光に関する研究では、主として観光客に焦点があてられ、訪日外国人旅行者の出身国によって、訪問先や観光行動、満足度に差異が生じることが示されている。しかしながら、インバウンド観光に関する研究において事例地域を選定し、地域や機関単位の取り組みといった観光地側からの視点と、観光客の旅行形態に関する視点の双方から詳細に考察することが重要であるにも関わらず（清水・祖田，2005）、こうした視点でとらえた研究の蓄積は不十分である。また、成田空港から近い成田山新勝寺における外国人旅行者の実態に関する大木（2006）の報告¹⁾があるものの、日本の国際空港周辺におけるインバウンド観光に焦点をあてた研究の蓄積は不十分である。しかしながら、インバウンド観光の玄関口である国際空港周辺には、さまざまな外国人旅行者が訪問し、飲食やショッピングといった観光行動がみられ、それに合わせて観光関連産業において多様なサービスが展開されていると考えられる。

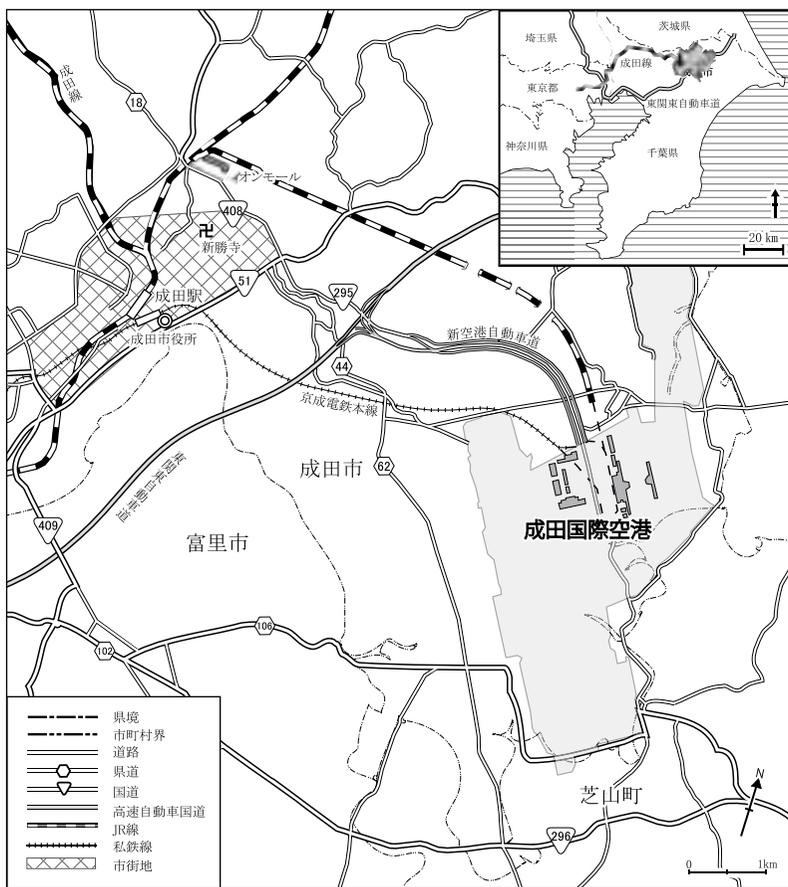
このように、観光産業の経営と外国人旅行者の

行動の双方から国際空港周辺を捉えることは、そこでの観光関連産業の持続的な発展にとって極めて重要である。したがって、国際空港周辺におけるインバウンド観光に関する研究の蓄積が必要であると考える。以上より、本稿の目的は、成田国際空港（以下、成田空港）周辺におけるインバウンド観光の地域特性について、最も代表的な観光関連産業である宿泊施設の経営と外国人旅行者の行動特性に着目して明らかにすることである。

分析の手順は以下の通りである。まず、統計資料をもとに、成田空港周辺地域の性格と地位を検討する（Ⅱ章）。Ⅲ章では、宿泊施設へのアンケート調査および聞き取り調査、統計資料をもとに、成田空港周辺における宿泊施設の立地と特徴、宿泊客の特徴を分析する。また、成田空港周辺にお

ける宿泊施設における外国人の受け入れ状況について明らかにする。Ⅳ章では、観光関連機関や宿泊施設、大型商業施設への聞き取り調査をもとに、欧米系個人旅行者およびフライトクルーと、中国人団体旅行者の成田空港周辺における観光行動について解明する。最後に、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ章を踏まえ、成田空港周辺におけるインバウンド観光の地域特性について考察する（Ⅴ章）。

調査対象地域は、千葉県成田市、富里市、芝山町からなる成田空港周辺である（第1図）。成田空港は1978年5月20日に開港した国際空港であり、2007年の航空旅客数は年間約3,539万人である。また、成田空港は貿易港としての機能も有しており、半導体等電子部品や事務用品機器、科学光学機器といった機械類の輸出入が多い。



第1図 研究対象地域

成田空港周辺には、機内食工場²⁾をはじめとする空港関連の工場および倉庫が立地している(林, 1994)。成田空港から成田インターチェンジまでの新空港自動車道および国道293号線沿いには、飲食、会議・宴会、婚礼施設を完備した大規模なホテルや、空港利用者向けの民間駐車場³⁾(写真1)がみられる(河野, 1999; 宮崎, 2005)。また、成田山新勝寺からJR成田駅に続く表参道には、土産店や観光客向けの飲食店、旅館が多数立ち並んでおり、年間1,000万人以上の観光客が訪れる。このほか、郊外型の大型商業施設であるイオンモール成田も成田空港周辺における重要な観光資源である⁴⁾。

II 近年における訪日外国人旅行者の動向

II-1 訪日外国人旅行者の動向

近年、訪日外国人旅行者は経済不況に加えて、2001年の世界同時多発テロや2003年のSARSの流行といった世界情勢の影響を受けながらも増加し続けており、とくに、2004年以降に増加が著しい(第2図)。この要因として前述のVJCの実施が挙げられる。これにより、全国各地の自治体で訪日外国人旅行者の誘客活動が活発化し、外国人旅

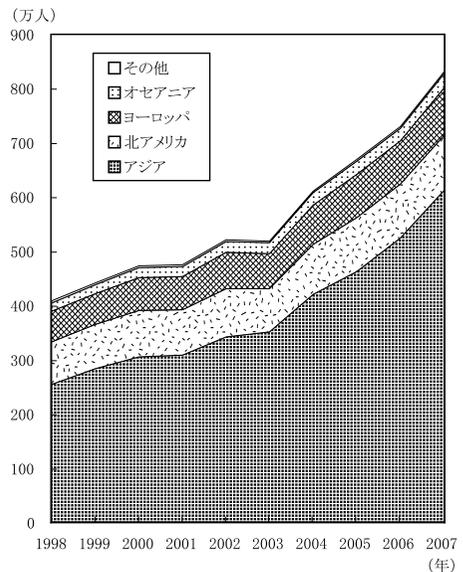


写真1 成田空港周辺の空港利用者向け駐車場
民間企業が運営する大規模な駐車場では、空港利用者の海外滞在中に自家用車を一時保管するサービスを提供している。

(2009年5月 鈴木撮影)

行者の増加につながった。外国人旅行者の発地をみると、アジアの増加が顕著であり、2004年からは年10%以上の伸び率を示している。なかでも、韓国および台湾人は訪日外国人旅行者全体の4割近くを占めており、2007年には韓国から約260万人(構成比31.2%)、台湾から約139万人(構成比16.6%)が日本を訪れている。加えて、近年中国からの訪日旅行者が増加している。VJCではアジアが訪日旅行の重点市場と位置づけられており⁵⁾、今後もアジアからの訪日外国人旅行者の増加が予想される。

第1表は2008年における外国人延べ宿泊客の都道府県別構成を示している。これによると、外国人旅行者が三大都市圏の都府県に集中している。こうした地域は、日光や京都、富士山、秋葉原、東京ディズニーリゾートといった著名な観光地や観光資源を有している。東京から箱根、富士山を経由して京都・大阪に向かう経路は、一般的に訪日外国人旅行のゴールデンルートと称されている(日本政府観光局編, 2009)。加えて、首都圏ではビジネス客も多い。



第2図 訪日外国人旅行者数の推移
(1998-2007年)

(日本政府観光局『日本の国際観光統計』により作成)

第1表 日本における外国人延べ宿泊客の
都道府県別構成（2008年）

	総数(万人)	割合(%)
東京都	734.9	33.0
大阪府	256.5	11.5
北海道	219.8	9.9
千葉県	157.0	7.1
愛知県	98.3	4.4
京都府	95.1	4.3
神奈川県	64.3	2.9
福岡県	52.7	2.4
兵庫県	45.6	2.0
静岡県	44.9	2.0
その他	455.7	20.5
合計	2,224.8	100

（観光庁（2008）により作成）

第2表 外国人正規入国者数の入国港別構成
（2008年）

	入国者数(万人)	割合(%)
成田	428.3	46.8
関西	164.1	17.9
中部	59.6	6.5
羽田	53.3	5.8
福岡	42.6	4.7
新千歳	31.1	3.4
博多(海港)	27.2	3.0
大阪(海港)	11.1	1.2
那覇	10.6	1.2
下関(海港)	10.6	1.2
その他	76.1	8.3
総数	914.6	100

（日本政府観光局（2009）により作成）

このほか、北海道は、台湾や香港といったアジアからの旅行者に人気が高く、豊かな自然や雪を目指して訪問する旅行者が多い。また、福岡県を中心とする九州地方は、距離的に近い韓国からの旅行者が多く、別府などの温泉観光地の人気が高い。

Ⅱ-2 千葉県および成田空港周辺における外国人旅行者

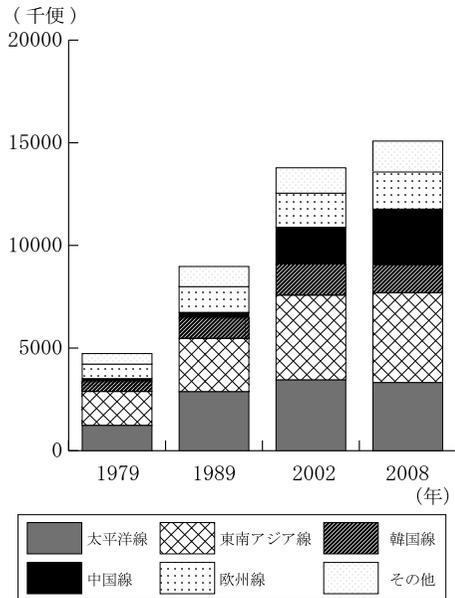
成田空港は国内の空港の中でも外国人入国者数で最大のシェアを占めており、外国人旅行者にとって日本の玄関口という重要な役割を担っている（第2表）。また、2008年9月現在、成田空港から36ヵ国2地域の96都市に乗り入れており、航空旅客数においても世界7位と高い地位を誇る（成田国際空港株式会社、2008）。成田空港における国際線の発着回数は1979年度（58,906回）から2007年度（180,781回）の間で約3倍に増加している。路線別の発着回数をみると、東南アジア路線と太平洋路線が大きな比重を占めてきた。近年における顕著な変化として、中国路線における旅客便の増加が挙げられる。2008年における中国路線の便数は1979年と比べ約19倍になっている（第3図）。

千葉県における外国人宿泊客数は東京都、大阪府、北海道に次いで4番目である（第1表）。県内に宿泊する外国人旅行者を国籍別にみると、アメリカ合衆国が313,230人と最も多く、次いで台湾の235,330人、中国の222,760人となっている（観光庁、2008）。2008年における千葉県内の市町村別外国人宿泊者は、成田市（1,257,421人）や富里市（151,039人）といった成田空港周辺に集中している（第4図）。成田市では1998年（701,374人）から2007年（1,318,107人）の10年間で、外国人宿泊客がほぼ倍増しており、2005年には日本人宿泊客数と外国人宿泊客数が逆転した（第5図）。地域別ではアジアからの宿泊客が全体のおよそ半数を占める。成田空港を抱える成田市では、今後も外国人宿泊客の増加が予想される。

Ⅲ 成田空港周辺の宿泊施設の経営特性

Ⅲ-1 成田空港周辺の宿泊施設の立地と特徴

本節では成田空港周辺の宿泊施設について、旅館・ビジネスホテル・コンベンションホテル・ゲストハウスの4つに分類し、それぞれの立地と特徴について述べる（第6図、第7図）。これらの定義は以下の通りである。まず、旅館は和式の構

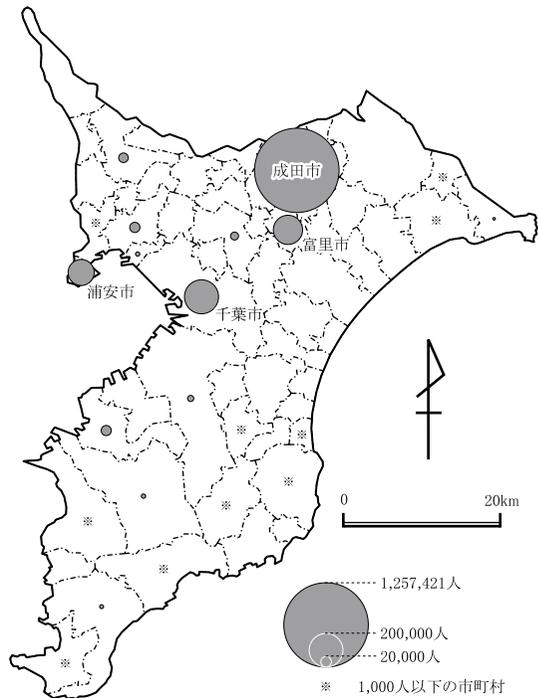


第3図 成田空港における国際線旅客便路線別発着回数割合
(1979・1989・2002・2008年)
(NAAリテール事業部資料および成田空港株式会社(2008)により作成)

造および設備を主とする施設と定義した。つぎに、ホテルは洋式の構造および設備を主とする施設とし、そのなかでも宴会・会議場を有し、会議等に対応できるホテルをコンベンションホテル、それ以外のホテルをビジネスホテルと定義する⁶⁾。また、簡易宿所営業許可を受け、宿泊場所が多人数によって共用する構造および設備であるものをゲストハウスとした。

1) 旅館

成田空港周辺には18軒の旅館があり(2009年5月現在)、その多くは新勝寺の参道沿いに立地している。これらの旅館は、江戸時代に盛んになった成田参詣に訪れる講集団の休憩・宿泊施設として発展した。新勝寺から離れて立地する旅館を含めたほぼすべての旅館が成田空港開港以前の1960年代までに開業している。こうした旅館は客室10室前後、定員30~40人程度の家族経営による小規模な施設である。

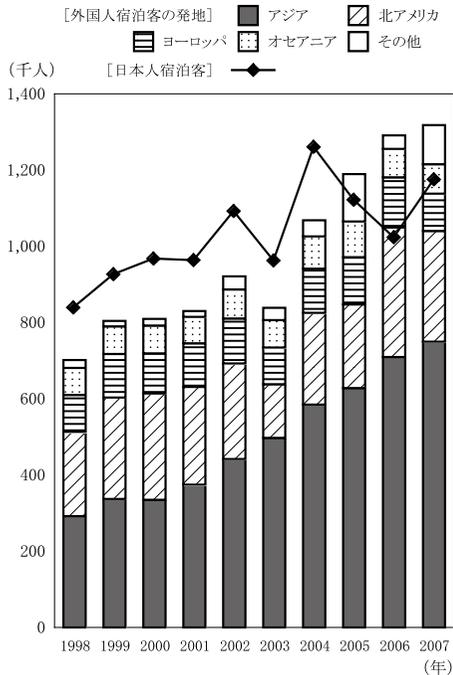


第4図 千葉県における市町村別外国人延べ宿泊者数(2008年)
(1979・1989・2002・2008年)
(千葉県『平成20年観光客入込調査概要』により作成)

講集団は主に首都圏から訪れ、特定の旅館を定宿とする傾向があるため、新勝寺周辺の旅館では宿泊者の多くが固定客である。成田市三里塚地区など成田市中心部から離れて立地する旅館は、空港関連工事の土木作業員などを主な顧客として受け入れている。しかしながら、1970年代以降の講集団の減少に伴い、旅館業を続けながら、新勝寺を訪れる観光客を対象とした土産物店や飲食店などを経営する旅館も少なくない。また、後述のように、和室での宿泊ができるという特性を生かし、欧米系個人旅行者の受け入れを開始した旅館もある。

2) ビジネスホテル

成田空港周辺において、ビジネスホテルは12軒である(2009年5月現在)。このうち、全国にチェーン展開する客室数が100室以上のビジネ



第5図 成田市における日本人および外国人宿泊者数の推移 (1998-2007年)
(成田市経済部観光プロモーション課資料により作成)

スホテルは3軒あり、市役所等の官公庁、JR成田駅や京成成田駅に近い市街地に立地している。ビジネスホテルの主な客層は、電車を利用する日本人のビジネス客や渡航の前泊利用者であると考えられる。一方、客室数が100室以下で地元資本のビジネスホテルは、国道51号沿線に多く立地する。幹線道路沿いに立地することで、空港周辺に立地する工業団地などに出張するビジネス客が多い。また、ビジネスホテルのシングル比率は88%⁷⁾であることから、ビジネス客が多いことがわかる。

ビジネスホテルの開業は1980年代から90年代にかけてのバブル期に多い。しかし、2000年以降も全国展開しているビジネスホテルの開業が続いており、施設数が増加している。

3) コンベンションホテル

コンベンションホテルは地域内に15軒ある(2009年5月現在)。これらは施設規模が大きく、

世界的ホテルチェーンや航空会社系列ホテルなどの知名度の高いホテル⁸⁾がほとんどである(写真2)。またコンベンションホテルの開業時期は、成田空港が開港した1978年直後に集中しており、空港利用者の前泊を見込んだ開業である。

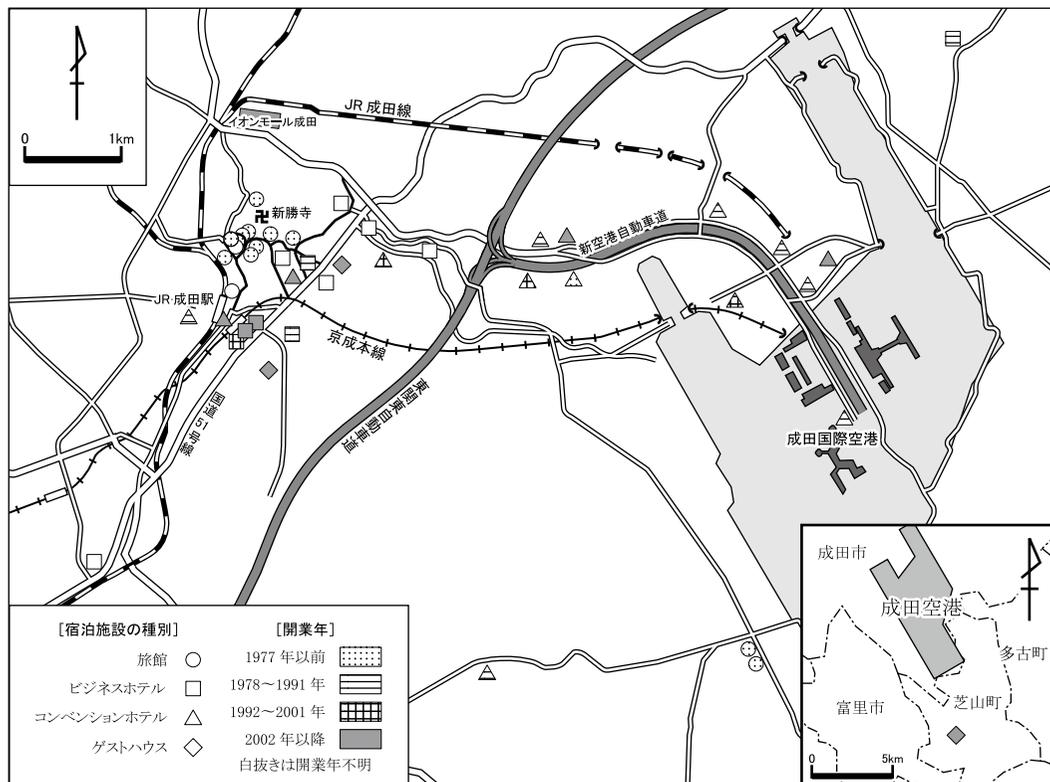
コンベンションホテルとビジネスホテルとの明確な違いは、その立地と付帯施設にあるといえる。コンベンションホテルのうち、15軒中10軒が成田空港に接続する新空港自動車道沿線に立地している。これらのホテルは、空港への近接性を確保するため、より空港に近い地域に立地し、空港への無料シャトルバスを運行している。

これらのコンベンションホテルでは、平均440室前後の客室を有しており、宿泊定員1,000名以上のホテルも4軒存在する。全客室数に対するシングル比率は平均41.5%⁹⁾にすぎない。また、コンベンションホテルは宿泊以外の利用に対応できるように、宴会・会議場、飲食施設、婚礼施設やプール・フィットネスクラブといった付帯施設を有している。宴会・会議場は企業研修や宴会利用に活用されているが、飲食施設や婚礼施設について整理・縮小を進めるホテルもみられる。

開業以来、経営主体が変更されたコンベンションホテルは全体の約半数にあたる7軒にのぼる。こうした施設は経営主体の変更とともに、施設の改修が行われ再度開業している。また近年では、外資系企業の新規参入が増加している。1990年代後半から2000年代に再度開業したコンベンションホテルのほとんどがこうした流れを受けたものである。

4) ゲストハウス

成田空港周辺には3軒のゲストハウスがあり(2009年5月現在)、うち2軒が成田市中心部に近い市街地に、1軒が成田空港南側の芝山町に立地している。ゲストハウスの開業は他の宿泊施設に比べ新しく、いずれも2004年以降である。ゲストハウスのなかで最大のは30名を収容できるが、客室はすべて相部屋であり、シャワーやトイレなどの設備は共用、食事は簡単な朝食のみの



第6図 成田空港周辺における宿泊施設の分布とその開業時期（2009年）

（現地調査および聞き取り調査により作成）

提供となっている。主な客層は欧米系バックパッカーである。アクセスが不便な施設では、経営者が空港や最寄り駅までの送迎を行っている。

ゲストハウスは全て個人経営であり、経営者が自身の海外旅行やゲストハウス利用の経験を生かして開業した。ゲストハウスの宣伝や宿泊予約は主にインターネットを経由して行われている。なかには、他地域のゲストハウスと情報交換や連携をするものもみられる。

Ⅲ-2 成田空港周辺の宿泊客の特徴

旅館の宿泊客は大半が日本人であり¹⁰⁾（第8図-a）、空港関連企業や地元企業への出張員が多い。また宿泊客数は季節変動が大きく、年始、ゴールデンウィーク、夏休みに多い。これは、新勝寺の参拝客や海外旅行者といった観光客の動向に起

因する。ビジネスホテルも日本人宿泊客が多く、外国人宿泊客は1割にも満たない（第8図-b）。しかしながら、駅前に多く立地するビジネスホテルの日本人宿泊客は、ビジネス客と渡航の前泊利用者が多く、季節変動が少ない。一方、コンベンションホテルでは、外国人宿泊客が半数以上を占める（第8図-c）。外国人宿泊客は欧米系宿泊客、アジア系宿泊客、航空会社の乗組員（以下、フライトクルー）に大別できる。

まず、欧米系宿泊客は時差ぼけを解消するために、2～3泊宿泊する。その多くが個人旅行者であり、主に欧米系ホテルチェーンを利用する。これは欧米系ホテルチェーンがインターネットによる集中予約システムを有しているためである（ロー、1997）。次に、アジア系宿泊客は団体旅行者が多く、渡航の前後に宿泊する。とくに中国人



注) ビジネスホテル2施設を除く 25 施設 (コンベンションホテル: 15 施設, ビジネスホテル: 8施設) について示す。

第7図 成田空港周辺におけるホテル客室数 (2009年)

(アンケート調査および成田市観光プロモーション課資料により作成)

の割合が高い。アジア系宿泊客の受け入れ契機として、中国・台湾・韓国の旅行会社との直接契約や、国内のランドオペレーターへの営業活動が挙げられる。中国人宿泊客を受け入れることは客室単価の低下につながるものの、大人数で宿泊するため、客室稼働率が上昇しホテル経営の安定につながる。

中国人宿泊客の一般的な訪日観光行動パターンは5泊6日、ないしは7泊8日であり、成田空港から入国し都内あるいは東京ディズニーリゾート、富士山、名古屋、京都、大阪等主要な観光地を全行程バスで巡り、関西空港から帰国するパターンと、その逆のパターンがみられる¹¹⁾。中国人宿泊客は全行程のうち1泊を成田空港周辺に滞在する。

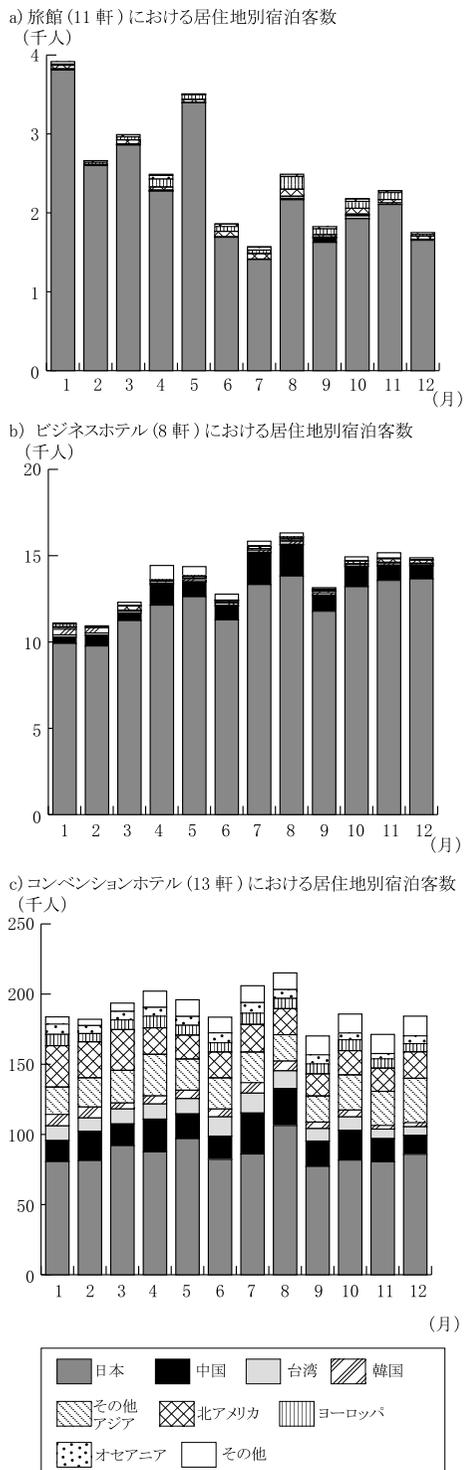


写真2 成田空港周辺の

コンベンションホテル

新空港自動車道沿線に立地する。なかには宴会・会議場や飲食施設、婚礼施設、プール・フィットネスクラブを有しているものもある。

(2009年5月 鈴木撮影)



第8図 成田空港周辺における宿泊客の月別動向 (2008年)
(成田市観光プロモーション課資料により作成)

コンベンションホテルの宿泊客数は1年を通して月あたり20万人程度であるが、そのうちの約5万人をフライトクルーが占めており、全宿泊客に占めるフライトクルーの割合は年間を通して安定している。一般的にフライトクルーを受け入れるホテルは航空会社と2年契約を締結する。航空会社は、提示された料金・サービス等を検討し提携ホテルを決定する。たとえば、空港に隣接するAホテルはアジア系航空会社2社と、成田駅前のBホテルは欧州系航空会社3社と契約している。

フライトクルーのチェックインとチェックアウトの時間は不規則であり¹²⁾、フライトクルーが搭乗する便の発着時間によって客室の利用時間は異なる。ホテルによっては、朝チェックインし、夜チェックアウトをするという客室のデユースもみられる。国際便のフライトクルーは1回のフライトにつき2日前後の休息が義務付けられている。したがって、多くのフライトクルーはコンベンションホテルに連泊し、余暇時間を時差ぼけの解消¹³⁾や買い物に費やす。

日本人宿泊客の多くは渡航の前泊利用であり、首都圏から来訪する。こうした宿泊客は、宿泊客用駐車場の無料サービスを利用し¹⁴⁾、自家用車で訪れる。また天候・ストライキ等により旅客機が欠航となることを想定して、ホテルは航空会社と提携を結んでいる。このほか、コンベンションホテルは企業の新人研修、会議でも利用されている。

ゲストハウスの宿泊客は、その大半が外国人であり、渡航の前後泊利用が多い。外国人宿泊客の多くはアメリカなどの欧米系個人旅行者であり、「HOSTELWORLD.com」のようなインターネット上の宿泊予約サイトや、英語表記の自社ホームページを見て予約をする。外国人宿泊客の多くが学生であるため、繁忙期は夏休みや春休みなどの長期休暇期間である。

Ⅲ-3 宿泊施設における外国人の受け入れ状況

1) 外国人の受け入れの展開過程

ここでは、第9図をもとに成田空港周辺の宿泊施設における外国人の受け入れの展開過程につい

施設 類型	施設 番号	外国人と日本人の比率	外国人宿泊者の居住地 (外国人に占める割合)	クルー (社)	団体ツアー		開業年	客室数 (室)	付帯 施設
					開始年	主な発地			
旅館	1		米(30%)、豪(20%)、伊(10%)	1	不明	不明	1904	10	
	2		仏(8%)、芬(1%)、米(1%)				1825	6	
	3		不明				1958	不明	
	4		米(10%)				明治初期	22	
	5		欧(45%)、豪(23%)、米(22%)				1740頃	27	
	6		豪、加				1767	19	
	7		なし				1927	不明	
	8		なし				1798	10	
	9		独、米				1877	不明	
	10		なし				不明	8	
	11		なし				明治初期	8	
	12		なし				不明	12	
	13		なし				1975	5	
	14		なし				1953	15	
	15		なし				1890頃	7	
	16		なし				1953	13	
	17		なし				1870	6	
ビジネスホテル	18		比、中	1	不明	不明	1978	不明	なし
	19		中(90%)、米(8%)、韓(2%)	1998	不明	中	1991	90	A
	20		不明	不明	不明	中	1990	20	A
	21		不明	なし	不明	不明	2000	130	なし
	22		米(24%)、英(9.7%)、台(7.7%)	6	なし	不明	2005	142	なし
	23		(不明)	なし	3	不明	1990	31	A
コンベンションホテル	24		不明	不明	不明	不明	1978	209	A
	25		中(90%)、台	不明	不明	中、台	1995	800	D
	26		中、東	6	2002	中	2002	245	A
	27		中(36%)、米(15.6%)、韓(6.4%)	不明	不明	中、韓、台	1987	484	D
	28		台、中、韓、泰	不明	2003	台、中、韓、泰	1989	396	D
	29		米(70%)、泰、東	不明	1985	台、東	1985	712	D
	30		中(50%)、新(30%)、米	2	2006	中、台、新、マ、伊	1996	307	B
	31		オ、北米、韓	1	不明	不明	1978	721	D
	32		豪(17%)、米(15%)、仏(9%)	5	2003	中、台	2003	248	D
	33		泰(65%)、エ(25%)	不明	1988	韓、香、中(上海)、台	1974	501	C
	ゲストハウス	34		米(50%)、豪、加、英、欧				不明	不明
35			豪	2004				不明	
36			蘭、英	2005				不明	

■ 外国人宿泊客 □ 日本人宿泊客

米=アメリカ 豪=オーストラリア 伊=イタリア 仏=フランス 芬=フィンランド 欧=ヨーロッパ 独=ドイツ 中=中国
韓=韓国 台=台湾 エ=エジプト 北米=北アメリカ 新=シンガポール マ=マレーシア 加=カナダ 泰=タイ

- A: レストランまたは会議室・宴会場, レストラン+会議室・宴会場
- B: レストラン+会議室+スポーツ施設
- C: レストラン+会議室+婚礼施設+エステ・美容施設
- D: レストラン+会議室+婚礼施設+スポーツ施設+エステ・美容施設

第9図 成田空港周辺の宿泊施設における外国人宿泊客の特徴と施設の概要 (2009年)

(聞き取り調査およびアンケート調査により作成)

て述べる。

欧米系の個人旅行者やフライトクルーの受け入れは、成田空港開港時から成田空港周辺のコンベンションホテルで行われていた。

一方、台湾をはじめとしたアジア系団体旅行者

の受け入れは1985年に施設29で開始された。同様に、1988年に韓国をはじめとしたアジア系団体旅行者の受け入れが施設33によって始まった。1980年代後半には、韓国人を中心とした外国人団体旅行者は、東京都港区のSホテルや、施設29・33と

いった低廉なホテルに宿泊する傾向にあった。しかし、その後、成田空港周辺の宿泊施設では、アジア系団体旅行者の受け入れは進展しなかった。

2000年代前半になると、本格的に多くのコンベンションホテルで中国や台湾をはじめとするアジア系団体旅行者の受け入れがみられるようになった。その要因として、以下の5点が考えられる。第1に、第5図でみたように、中国線と東南アジア線の増便と、2000年の中国人に対する訪日団体観光ビザの発給である（劉2002）。

第2に、成田空港への交通アクセスの改善によって成田空港周辺に宿泊する必要性が低下し、日本人宿泊客数が停滞したことがある。この背景として、1991年に成田エクスプレスが開業され、東京都心部との近接性が向上したことが挙げられる。

第3に、大規模ホテルの出現により客室の供給過剰が起こり、成田空港周辺の宿泊施設で宿泊料金が大幅に低下した。1995年、成田空港周辺で最大規模の施設25が開業した。このコンベンションホテルは、800室の客室を有し、1,224人を収容できる。このホテルの出現が、成田空港周辺の宿泊施設における宿泊料金の低下を誘引した。施設25の開業当時、成田空港周辺のコンベンションホテルにおける一般的な宿泊料金は、1泊12,000円程度であったが、施設25は1泊6,000～9,000円程度という低廉な価格を設定した。この結果、成田空港周辺のコンベンションホテルにおいて宿泊料金の値下げ競争が激化し、ほとんどの宿泊施設の宿泊料金が10,000円以下になった。

第4に、成田空港周辺における宿泊施設は、先述した価格競争の結果、他地域の宿泊施設よりも安価な宿泊料金設定が可能となり、低廉な宿泊料金を求める外国人の利用が増加した。アジア系団体旅行者は、東京都心部や東京ディズニーリゾートを来訪するにもかかわらず、宿泊料金の高い東京都心部のホテルや、東京ディズニーリゾート周辺の高級リゾートホテルを避ける傾向がある。これは、アジアからの団体旅行商品を販売する旅行会社が、宿泊費を削るためにより安価な宿泊施設

を選択するためである。さらに、成田空港周辺のコンベンションホテルでは、アジア系団体旅行者に対し、安価な宿泊料金を設定している。たとえば、2009年現在の施設29における宿泊料金をみると、インターネット上の宿泊予約サイトによる宿泊が1泊朝食なしで1人あたり7,000円であるのに対し、フライトクルーによる宿泊が1泊朝食なしで6,000円、アジアから団体旅行者が1泊朝食付きで5,500円である。

第5に、成田空港周辺のホテルは、自ら東アジアや東南アジアの旅行会社や、国内のランドオペレーターへのプロモーション活動を積極的に行っている。

2) 外国人の受け入れの事例

(1) コンベンションホテル（施設29）

施設29は、国道295号線沿いに立地するコンベンションホテルである。国内ホテルチェーンによる直営で、1985年に開業した。1989年からアメリカン航空やユナイテッド航空のフライトクルーを受け入れており、1990年代当時はフライトクルーによる利用が非常に多く、1日当たり250名を受け入れていた。成田空港の発展に伴うフライトクルーや宿泊客の増加により、1995年にシングル305室を増築した。現在の客室数は708室である。このほか、レストランや会議室、ブライダル施設も完備している。

外国人宿泊客は全体の60%を占め、そのうち70%はフライトクルーである。施設29では、航空会社計6社と契約を結んでおり、アメリカ、タイ、マレーシア、インドネシアのフライトクルーが多い。これは、フライトクルー専用のフィットネスクラブやレストランなどの設備を備えているためである。こうした設備は航空会社との契約の際に必要な条件となる。また、フライトクルーはホテル内の高価な飲食店を利用せず、イオンモールや門前町の飲食店やパブ、バーに出向き、買い物や食事を済ませる者が多い。

フライトクルー以外の外国人宿泊客のうち80%は団体旅行者で、中でもマレーシア、インドネシ

ア、フィリピン、タイ、シンガポールなどの東南アジアや台湾のツアー客の受け入れが多い。施設29では、開業当初の1985年以降、こうした団体旅行の受け入れを行っており、これらの国々へのプロモーション活動にも積極的である。しかし、海外からのツアー客の受け入れは客室単価の低下につながり、また海外経済の影響を受けやすくなるというマイナス面をもつ。

(2) ビジネスホテル（施設20の事例）

国道51号線沿いに立地する施設20は、1990年に開業したビジネスホテルである。部屋数と収容人員はそれぞれ20部屋、50名である。客室の内訳は洋室が17室、和室が3室である。また、施設20は宴会場と飲食施設を完備しているが、会議室は設置されていない。

施設20では、日本人宿泊客が全宿泊客の90%を占めており、外国人宿泊客は10%程度にすぎない。外国宿泊客のほとんどが中国人団体旅行者であり、旅行会社を通じて予約する。この場合、中国人団体旅行者は主に成田空港から帰国する前日に施設20を利用する。

日本人宿泊客が多い理由としては、企業との提携を行い、日本人ビジネス客を積極的に受け入れているためである。たとえば、成田空港関連の企業や工業団地といった地元企業や、フィリピンや中国に進出した日本の多国籍企業との提携を結んでいる。このように、施設20は日本人の固定客を積極的に受け入れており、安定した収入が見込めるため、外国人の受け入れにはあまり積極的ではない。

(3) 旅館（施設5の事例）

成田山新勝寺の表参道近くに立地する施設5は、1738年頃に開業した老舗旅館である。これまで新勝寺に参詣する講集団や観光客の休憩・宿泊施設として発展してきた。収容人員はおよそ120名、バリアフリーに対応した1部屋を含む27の客室を備えており、年間約1万人が宿泊している。成田空港周辺に立地する旅館では比較的大規模で

あり、大浴場や宴会場、売店、コインランドリーなどの設備も充実している。宴会場は200名までの団体まで対応が可能であることから、成田市内を中心に法事や祝い事、宴会に利用されている。

施設5はこれまで新勝寺の講集団の定宿として機能してきたが、昭和40年代をピークにその利用は減少している。このような状況下、施設5は事業の多角化を図っている。たとえば、外国人宿泊客の受け入れや、日帰り客向けの飲食店の開業、高齢者向けのデイサービス事業を行っている。

施設5は、「ジャパニーズ・イン・グループ」¹⁵⁾に加盟した1998年頃から外国人宿泊客の受け入れを始めた。小規模な旅館では海外へ向けたプロモーション活動を単独で行うことが難しいため、「ウェルカム・イン」¹⁶⁾に加盟し、他の宿泊施設と連携することで外国人旅行者への情報提供を行っている。また、施設5はロンリープラネットに掲載されている。外国人宿泊客数は全体の1割程度であるが、リピーターやツアーによる利用も徐々に増加している。外国人宿泊客の主な発地は、ヨーロッパ、オセアニア、アメリカ合衆国である。

(4) ゲストハウス（施設35の事例）

富里市に立地する施設35は、2004年に外国人旅行者向けの宿泊施設としてテナントビルの3階に開業した。京成成田駅に近接しているため、自動車による送迎は行っていない。宿泊料金は1泊素泊まり2,980円である。客室は4人部屋が2室、6人部屋が2室で、いずれも二段ベッドが備えつけられている。年間定員稼働率は50%程度である。また、東京や京都といった他地域のゲストハウスのパンフレットも備えつけてある。

施設35の経営者は海外経験が豊富である。大学在籍中に独学と海外旅行で英語の語学力を高め、入社入社後に東アジアやヨーロッパ、中東をはじめ20ヵ国以上の海外出張を経験した。その後、語学力を生かして欧米系の個人旅行者の集客を見込んで、ゲストハウスを自己資金で開業した。現在、30歳代の経営者が1人で経営を行っているが、繁忙期には短期のアルバイト従業員を雇っている。

また、施設35の経営者は昼間の空き時間を利用して英会話教室も経営している。2008年現在、約60人の生徒が在籍しており、なかでも地元住民や航空会社の従業員が多い。なお、英会話教室による収入は全体の約3割を占める。

施設35の宿泊客は外国人がおよそ85%を占める。なかでもオーストラリアや欧米系個人旅行者が多い。外国人宿泊客のほとんどが観光を目的とした来日であり、空港利用の前後に利用する。主な宣伝媒体として、日本語および英語表記の自社ホームページ、「HOSTELWORLD.com」などのインターネット上の宿泊予約サイト、財団法人国際観光サービスセンターのウェルカム・イン予約センター（成田空港など）が挙げられる。なかでも、自社ホームページは最も重要な宣伝媒体であり、全宿泊客の約半数が自社ホームページによる予約である。

欧米系の外国人は湯船に浸かる習慣がないため、大浴場を置かず、シャワールームを2室設置している。また、インターネット設備も充実しており、無料の無線LANや1回100円で使用できる備え付けパソコンが設置されている。

3) 外国人の受け入れの差異

コンベンションホテルは、フライトクルーやアジア系団体旅行者の受け入れに積極的である。前述のように、コンベンションホテルが自ら海外の旅行会社や国内のランドオペレーターへのプロモーション活動を行っている。また、フライトクルーやアジア系団体旅行者は、1組あたりの人数が多く、客室稼働率の向上において重要な役割を果たした。加えて、コンベンションホテルが有する飲食施設やフィットネスクラブなどの付帯施設や、無料シャトルバス、客室数の多さが、彼らの受け入れの際に有利であった（第9図）。

一方、桜の季節（4月）や夏休み（7・8月）などの繁忙期に中国人宿泊客が多いものの（第8図-b）、ビジネスホテルは外国人の受け入れに積極的ではない。その理由として、付帯施設が充実していないため（第9図）、フライトクルーや

アジア系団体旅行者の受け入れに不利であったことや、空港周辺の工業団地や工事関係者、地元企業との提携により、日本人ビジネス客の集客が見込めることが挙げられる。

近年、零細な宿泊施設も欧米系個人旅行者から注目が集まっている。施設29といった旅館では、英語表記のガイドブックへの掲載を契機として、畳、ふすまといった日本の生活を体験したい欧米系個人旅行者を受け入れる動きもみられる。また、施設25のようなゲストハウスでは、インターネット上の宿泊予約サイトや自社ホームページを生かし、開業当時から学生のバックパッカーをはじめとした低予算志向の欧米系外国人旅行者を受け入れている。こうした旅行者は他の宿泊客や経営者との交流を求めて宿泊する。

このように、成田空港周辺の宿泊施設は、その特徴によっていかなる客層を受け入れるかを決定しており、こうした客層の差異によって地域内での競争を回避している。

IV 成田空港周辺における外国人宿泊客の行動特性

本章では、ホテルや大型商業施設、成田山新勝寺の表参道の商店街への聞き取り調査と景観観察をもとに、成田空港周辺における欧米系個人旅行者およびフライトクルーと、アジア系団体旅行者の行動特性を明らかにする。なお、アジア系団体旅行者については、近年増加が著しい中国人団体旅行者について論じる。

IV-1 欧米系個人旅行者およびフライトクルーの行動特性

欧米系個人旅行者とフライトクルーは主としてホテルが運行する無料シャトルバス（以下、シャトルバス）で成田空港周辺を移動する。欧米系個人旅行者は、夕方に成田空港に到着した場合、コンベンションホテルで一泊する。翌朝、シャトルバスで表参道の飲食店や土産物店に立寄り、なかには、シャトルバスでイオンモールへ訪問する者もいる。その後、成田駅より鉄道で都内の観光地を訪問する（第10図）。同様に、旅館に宿泊する

欧米系個人旅行者は徒歩で、ゲストハウスに宿泊する欧米系個人旅行者はその従業員が所有する自家用車もしくは徒歩で、上記の訪問地に立寄る傾向がある。

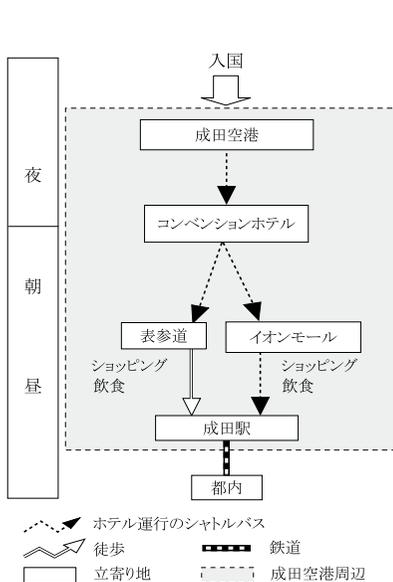
一方、フライトクルーは次のフライトまでの時間を成田空港周辺で過ごす。その際に利用される交通手段は、シャトルバスである。フライトクルーの代表的な観光行動をみると（第11図）、成田空港に到着した後、コンベンションホテルで仮眠をとり、そこでフィットネスクラブを利用したり、ジョギングをしたりする。つぎに、成田山新勝寺の表参道沿いにある馴染みのバーやレストランへ行き、他のフライトクルーとの交流を図る。その後、コンベンションホテルへ戻り、睡眠をとる。翌朝にはイオンモールのドラックストアや100円ショップで買い物をする。このように、次のフライトまでの時間を成田空港周辺で過ごした後、成田空港より出国する。

先述のように、欧米系個人旅行者やフライトクルーの訪問地として、成田山新勝寺とその表参道が挙げられる。表参道の商店では、郷土玩具や木製の日用雑貨といった土産物（写真3）や日本料

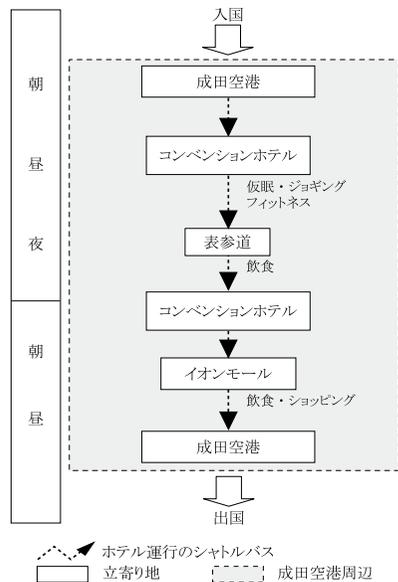
理（写真4）は、欧米人から人気を集めている。とくに仲町では伝統的建造物の保全事業が行われ（大木, 2006）、現在でも老舗店舗が残されている。

また、表参道にはフライトクルー向け飲食店やエスニックレストラン、バーやパブといったナイトスポットもあり、主に欧米系個人旅行者やフライトクルーによって利用される（第12図）。なかには、フライトクルー限定のコース料理を提供するエスニックレストランもみられた（写真5）。JR成田駅に近い上町と花崎町では、モータリゼーションの進展と大型商業施設の出現などによって空き店舗が増加したことや、セットバック事業が進められたこと（大木, 2006）により、テナントの入れ替えが見られ、外国人の集客を見込んで新規に開業する店舗もみられた。たとえば、フライトクルーの集客を見込んで1999年に開業した花崎町のパブでは、利用客の約半数を占める外国人のうち、欧米系が70%を占めている（写真6）。

また、フライトクルーのなかには、郊外の大型商業施設であるイオンモールを訪問する者もみられる¹⁷⁾（第12図、写真7）。フライトクルーの買



第10図 成田空港周辺における欧米系個人旅行者の観光行動の事例（2009年）
（現地調査により作成）



第11図 成田空港周辺におけるフライトクルーの観光行動の事例（2009年）
（現地調査により作成）

物行動の特徴として、シャンプー・リンス、化粧品、健康食品、子供用紙オムツといった日用品の箱買いやまとめ買いが挙げられる。なお、このような大量購入に対して、イオンモールでは、2009年より、機内持ち込み可能な大きさのダンボールを無料で配布している。

欧米系個人旅行者やフライトクルーが新勝寺の表参道およびイオンモールへ訪問する要因として、前述のシャトルバス¹⁸⁾の存在が挙げられる(第



写真3 成田山新勝寺表参道の土産物店

欧米系個人旅行者に好まれる郷土土産や竹製の日用品雑貨を販売している。店の奥には外国人が買い物をしている姿が確認できる。

(2009年5月 福田撮影)



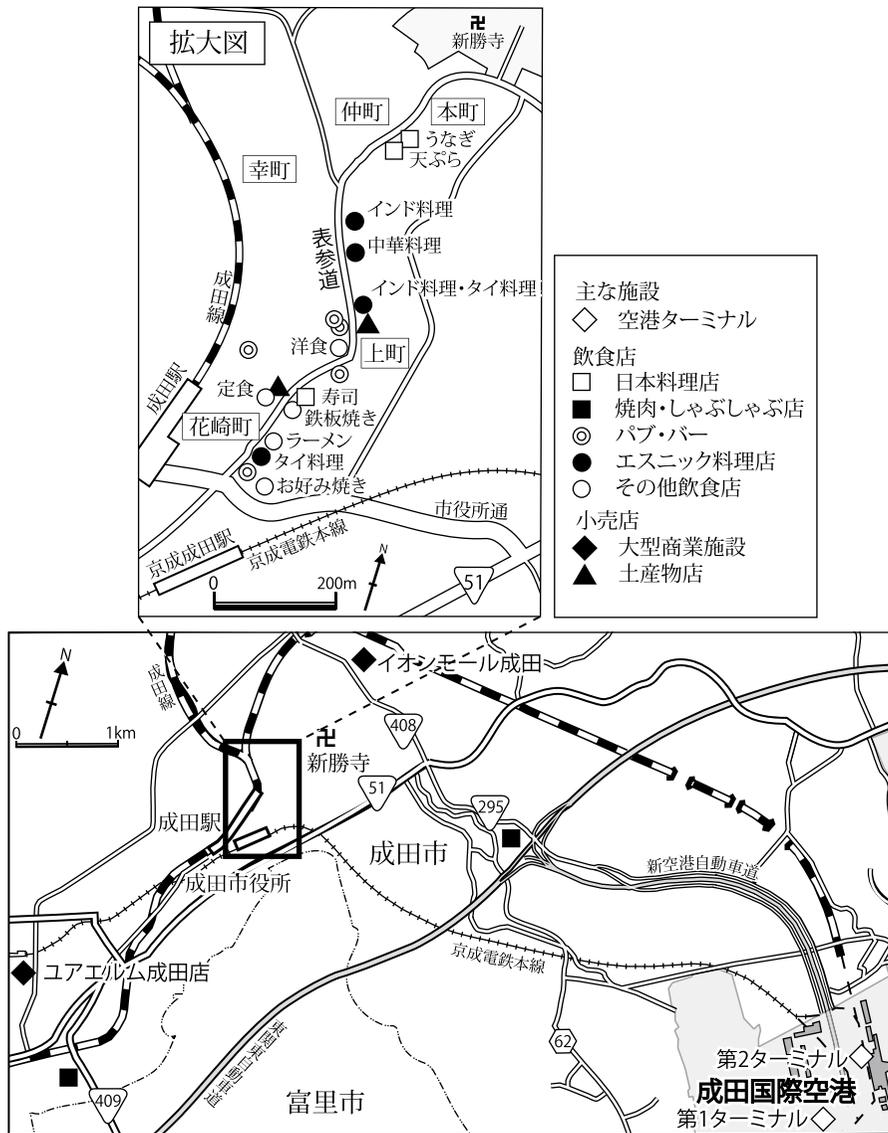
写真4 成田山新勝寺表参道のうなぎ料理店
店舗の正面口ではうなぎの蒲焼の調理が行われている。表参道の商店では、このような観光客へ向けた景観的な工夫もなされており、欧米系を中心とした観光客を惹きつけている。

(2009年5月 鈴木撮影)

13図、写真8)。この運行本数をみると、施設29では、ホテル～空港間が1時間に1～3本のペースで1日28本、ホテル～京成成田駅間が1時間に1本のペースで1日18本、うち6本がイオンモール経由である。

シャトルバスの運行は、成田空港周辺で最も早く開業した施設30が1974年から開始した。施設30の親会社は、本来タクシー事業も運営していたため、シャトルバスによる送迎の重要性を認識していた。その後、他のコンベンションホテルでもシャトルバスが導入された。また、1980年代後半、イオンモールの前身であるジャスコが成田へ進出したことで、シャトルバスの運行状況に変化が生じた。当時、ジャスコは成田市役所の向かいに立地しており、市の要望を受けたホテルが、ホテル～成田駅間のルートにジャスコでの停留所を加えた。その後、ジャスコが移転した後も同ルートの運行が続けられ、各コンベンションホテルにおいて、空港～ホテル間のルートとともに、主要なルートとなっている。なおイオンモールは、ホテルと協議しつつ、シャトルバスの時間調整を行っている。シャトルバスは無料であるため、コンベンションホテルを利用するフライトクルーや欧米系個人旅行者にとっての主要な移動手段となった。これによりホテルに滞在するフライトクルーや欧米系個人旅行者が、表参道やイオンモールへ出向くようになった。その結果、表参道におけるテナントの新規参入や業種転換、イオンモールにおけるフライトクルー向けサービスの導入などがみられた。

また、成田市内で入手できる観光情報も欧米系個人旅行者やフライトクルーが訪問先を決定する上で重要な役割を果たしている。たとえば、成田市観光協会および飲食店のホームページ、全日空(ANA)のスタッフが作成・配布している飲食店マップ「NARITA NAVI」(日本語・英語・中国語表記)、コンベンションホテルに設置されたイオンモールのショッピングガイド(英語版と中国語版)がある。とくに、インターネット設備を設置するコンベンションホテルが増加したことによ



第12図 成田空港周辺における主な外国人宿泊客利用施設の分布（2009年）
（現地調査により作成）

り、それを利用して成田市観光協会ホームページを閲覧する外国人旅行者やフライトクルーがみられるようになった。また、コンベンションホテルのなかには、英語で周辺の観光情報を紹介するサービスを行っているものもある。このほか、『Lonely Planet JAPAN』（10版、2007年刊）には、うなぎ料理店やバーなども掲載されている。

Ⅳ-2 中国人団体旅行者の行動特性

中国人団体旅行者は、成田空港から入国した後、旅行会社が手配した貸切バスで成田空港周辺や、東京や大阪といった大都市周辺を訪問する。中国人団体旅行者の成田空港周辺における代表的な観光行動をみると、関西や都内を訪問した中国人団体旅行者は、コンベンションホテルで1泊し、翌朝に貸切バスでイオンモールを訪問し、買い物や



写真5 インド料理店におけるフライトクルー限定のコース料理

表参道周辺には、フライトクルー限定メニューの看板を掲示する店舗もある。

(2009年5月 福田撮影)



写真6 成田山新勝寺表参道のフライトクルー向けのバー

利用者の約半数が外国人という表参道のバー。夜間になると、成田空港周辺のコンベンションホテルに宿泊するフライトクルーの交流の場となる。

(2009年5月 鈴木撮影)

食事を済ます。または、郊外の焼肉店やしゃぶしゃぶ店に立寄り。その後、成田空港より帰国する(第14図)。このような行動は、他のアジア系団体旅行者でもみられる。

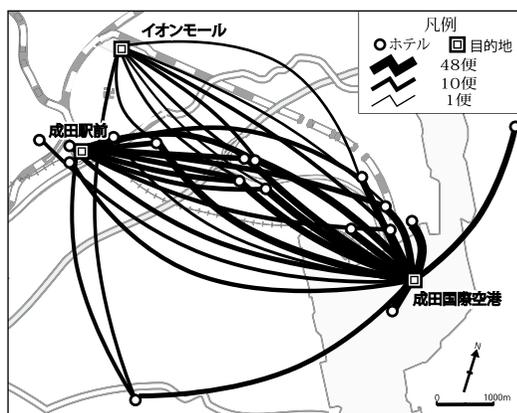
中国人団体旅行者にとって、ショッピングは訪日観光の大きな目的のひとつである。店舗数も豊



写真7 イオンモール成田

欧米系個人旅行者やフライトクルー、中国人団体旅行者など多くの外国人が利用する大型ショッピングモール。

(2009年5月 鈴木撮影)



注) 便数に関してはホテル発のものを参照とした

第13図 成田空港周辺におけるホテルの無料シャトルバス運行状況(2009年)

(各ホテルホームページにより作成)

富で飲食店なども揃う大型商業施設は、ツアーの訪問先として定番となっている。中国人団体旅行者の旅行行程に大型商業施設が組み込まれており、渡航の当日もしくは前日の空き時間に貸切バスで立寄り。

成田空港周辺には、国道408号線沿いのイオンモールと、京成本線・公津の杜駅前のユアエルム成田店¹⁹⁾がある。ここでは、外国人の買物客が全来店客数の約15%²⁰⁾を占めるイオンモールに



写真8 ホテル運行の無料シャトルバス
 コンベンションホテルから無料シャトルバスに乗り込み成田空港へ向かうフライトクルーたち。彼らにとって、ホテル運行の無料シャトルバスは重要な移動手段である。

(2009年5月 鈴木撮影)

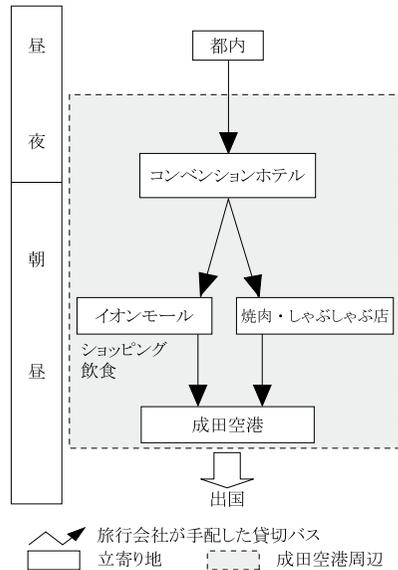
における中国人旅行者の行動特性とその対応について述べる。

中国人旅行者は、来日の際に多額の保証金が必要であるため、全体的に富裕層が多い（金2009a）。彼らは、スポーツ用品（アシックス・ミズノなど）や、腕時計（セイコー・シチズンなど）、化粧品（資生堂など）、電化製品といった日本製品やブランド品を購入する傾向がある。また、健康食品（ファンケル、DHCなど）や雑貨（100円ショップ、無印良品など）といった日用品を購入する者も多い。このような傾向はJNTOの調査でも指摘されている（国際観光振興機構2008）。このほか、ハローキティなどの日本のキャラクター

グッズも人気がある。

外国人買物客の急増を受けて、イオンモールでは彼らへの対応がみられる。具体的には、VISAなどの国際ブランドのクレジットカードで現金を引き出せるATMを設置した。また、2008年からは米ドルから日本円への両替機²¹⁾を設置したり（写真9）、中国のクレジットカードである銀聯カードの取り扱いを開始したりしている（写真10）。加えて、2002年には英語、2005年には中国語のフロアガイドが作成され、店内にも外国語表記がみられる。1階のレストラン街と2階のフードコートでは全ての店舗において英語表記のメニューや注意書きが掲示され、専門店には時計店における中国語表記の説明文の掲示（写真11）や、化粧品店における中国語のパンフレットの設置などがみられた。

中国人団体旅行者が大型商業施設を利用する要因として、団体客の受け入れに必要な設備を有していることが指摘できる。たとえば、大型の貸切バスに対応した駐車場や広いトイレ、集合スパー



第14図 成田空港周辺における中国人団体旅行者の観光行動の事例（2009年）
 （現地調査により作成）

ス、館内放送が挙げられる。また、大型商業施設は、多種多様な専門店やレストラン街、フードコート（写真12）を有しており、限られた時間で旅行者のあらゆるニーズに対応することができる。

このほか、中国人旅行者のなかには、団体客専用のしゃぶしゃぶ料理店（写真13）と、国内チェーンの焼肉料理店に立寄る者もいる。これらの施設

はそれぞれ国道295号線沿いの成田インターチェンジ付近、国道409号線沿いの富里インターチェンジ付近に立地する。中国人宿泊客が郊外のしゃぶしゃぶ・焼肉料理店を利用する要因として、これらに団体客を受け入れる広さがあることや、大型の貸切バスを駐車できること、インターチェンジに近く、東京方面もしくは成田空港方面に向か



写真9 イオンモール成田の両替機

外国人旅行者の急増を受け、2008年に導入された米ドルから日本円への両替機。業者からのリースで設置している。撮影当日は、1ドル=87円で取引されていた。

(2009年5月 福田撮影)



写真11 時計店における中国語の説明文

イオンモール内の専門店では、外国人買い物客への各種対応を実施している。時計店においては中国語表記の説明文が見られた。

(2009年5月 福田撮影)



写真10 銀聯カードの看板

外国人旅行者の急増を受け、2008年から中国のクレジットカードである銀聯カードが導入された。この看板はドラッグストアにおける銀聯カードの取り扱いを示している。

(2009年5月 福田撮影)



写真12 イオンモール成田のフードコート

イオンモールの2階に設置されたフードコートは、多くの買い物客で賑わいをみせていた。そこでは1階で購入した惣菜とフードコート内のメニューを食べ合わせる外国人もみられた。また、様々な言語が飛び交うなど、成田空港周辺施設ならではの光景を垣間みることができる。

(2009年5月 福田撮影)



写真13 郊外の団体客専用しゃぶしゃぶ店
国道295号線沿いのしゃぶしゃぶ店。手前には中国人団体旅行者が利用するマイクロバスが駐車している。
(2009年5月 鈴木撮影)

う途中で立寄れること、調理時間が短く、団体客の食事に適していること、中国人の中高年齢層は刺身などの生魚を避ける反面、加熱調理がなされた肉料理を好む傾向があること(国際観光振興機構, 2008)が指摘できる。

V 結論

本稿では、成田空港周辺におけるインバウンド観光の地域特性について、宿泊施設の経営と外国人宿泊客の行動特性を分析することによって明らかにしてきた。

成田空港周辺のホテルでは、成田空港の開港時から欧米系の旅行者やフライトクルーを受け入れていたが、アジア系団体旅行者が2000年代以降に急増した。その要因として、成田空港において中国線と東南アジア線が増便されたことや、2000年に中国人に対する訪日団体観光ビザの発給を開始したこと、成田エクスプレス開通によって日本人宿泊客数が停滞したこと、大規模ホテルの出現によって客室の供給過剰が起り、成田空港周辺の宿泊施設における宿泊料金が低廉化したこと、成田空港周辺のホテルが、自ら東アジアや東南アジアの旅行会社や、国内のランドオペレーターへのプロモーション活動を積極的に行っていることが

挙げられる。

コンベンションホテルはフライトクルーやアジア系団体旅行者の受け入れに積極的である。コンベンションホテルが有する飲食施設やフィットネスクラブなどの付帯施設や、無料シャトルバス、客室数の多さが、彼らの受け入れの際に有利に働いた。フライトクルーやアジア系団体旅行者は1組あたりの人数が多く、客室稼働率を安定させる上で重要な役割を果たした。

一方、ビジネスホテルは外国人の受け入れに積極的ではない。その理由として、ビジネスホテルの付帯施設が充実していないため、フライトクルーやアジア系団体旅行者の受け入れに不利であったことや、成田空港周辺の工業団地や工事関係者、地元企業との提携により、日本人ビジネス客の集客が見込めることが挙げられる。

また、近年一部の旅館でも欧米系個人旅行者の受け入れがみられる。彼らが利用する理由として、英語表記のガイドブックに掲載されたことや、畳やふすまといった日本の生活を体験できることが挙げられる。ゲストハウスは2000年代以降に出現し、インターネット上の宿泊予約サイトや自社ホームページを生かし、開業当時から学生のバックパッカーといった低予算志向の欧米系外国人旅行者を受け入れている。こうした旅行者は他の宿泊客や経営者との交流を求めて宿泊する。旅館やゲストハウスは、主にフライトクルーやアジア系団体旅行者を受け入れているコンベンションホテルと差別化するために、欧米系個人旅行者に着目したといえる。

他方、成田空港周辺における外国人の行動特性は、旅行形態や交通手段、嗜好と大きく関係している。まず、成田空港周辺の宿泊施設を利用する欧米系外国人旅行者やフライトクルーは、成田山新勝寺やその周辺地域を訪問する。成田空港開港以来、欧米系個人旅行者にとってホテルが運行する無料シャトルバスが、成田空港周辺の観光において重要な役割を果たしている。

つぎに、2000年代前半から増加した中国人団体旅行者の行動をみると、成田空港周辺のホテルに

宿泊し、渡航までの空き時間に旅行会社が手配した貸切バスで郊外の大型商業施設および飲食店を訪問する。その際、東京都区部や東京ディズニーリゾートを訪れるにもかかわらず、アジア系団体旅行者は成田空港周辺のコンベンションホテルに宿泊する傾向がある。その理由として、客室数が多いため、アジア系団体旅行者を受け入れることができたことや、彼らに対して安価な宿泊料金を設定していることが挙げられる。

以上のように、成田空港周辺における宿泊施設が、外国人旅行者やフライトクルーをそこに滞在

させ、成田市街地や郊外の大型商業施設、飲食店への流動を促す役割を果たしていることが明らかになった。

2010年には成田新高速鉄道の開通が予定されており、これによって日暮里（東京都荒川区）～成田空港間が最速36分で結ばれる。このような状況下、成田空港周辺の宿泊施設では、渡航の前後に利用する日本人宿泊客がさらに減少することが予想される。今後、外国人宿泊客の受け入れ態勢を整えることは、成田空港周辺の宿泊施設が存続する上でますます重要になるであろう。

現地調査に際しては、成田市観光プロモーション課の斎藤博之・長谷剛史・堀越千里・宮田智之各氏、経済部商工課の藤崎 潔氏、成田市観光協会の神宮敏行氏、成田国際空港株式会社の大平 篤・黛 政素・福井順子各氏、イオンモールの植沢 俊・福家敏記各氏、成田旅館組合の林 隆浩組合長、宿泊施設の方々、保税蔵置場、機内食工場および成田空港民間駐車場事業協同組合の方々には多大なご協力をいただきました。データ収集の際には、愛媛大学法文学部の井口 梓先生、筑波大学大学院生命環境科学研究科の淡野寧彦氏、今回の調査に参加された門前町班の皆様にご協力いただきました。

また、本稿の骨子は2009年度人文地理学会大会（於・名古屋大学）にて発表した。

[注]

- 1) 成田山新勝寺表参道の飲食店では航空関連従事者が、旅館や土産店では観光目的の外国人旅行者が多いことを述べた事例である。
- 2) 成田空港周辺には、7軒の機内食工場があり、うち5軒は空港外に立地している。その要因としては、空港内における高額な地代および上下水道・光熱費と、保冷技術の向上が挙げられる（機内食工場T社への聞き取り調査による）。
- 3) 空港利用者向けの民間駐車場会社は、国道293号沿いに事務所と小規模な駐車場を構えており、そこから離れた地代の安い場所に保管用の駐車場を有している。なかには、駐車場から空港ターミナルまでの無料送迎や洗車、ペットホテルなどのサービスを提供しているものもある（成田空港民間駐車場事業協同組合への聞き取り調査による）。なお、駐車料金は1泊2日で500～2,500円程度、1週間で3,400～12,000円程度である（宮崎、2005）。
- 4) イオンモール成田は、2008年3月に成田市観光協会に加盟した（成田市観光協会への聞き取り調査による）。
- 5) VJCの重点市場には12ヵ国・地域が指定されており、その内訳はアジアが6ヵ国・地域（韓国、台湾、中国、香港、タイ、シンガポール）、北アメリカが2ヵ国（アメリカ合衆国、カナダ）、ヨーロッパが3ヵ国（イギリス、フランス、ドイツ）、オセアニアが1ヵ国（オーストラリア）である。
- 6) 本論文における宿泊施設の種別は、成田市観光プロモーション課の定義によるものである。
- 7) ビジネスホテル全12軒中5施設の平均値である。
- 8) コンベンションホテルは以下の15施設である。

インターナショナルガーデンホテル成田、ANA クラウンプラザホテル成田、東横イン成田空港、成田エアポートレストハウス、成田エクセルホテル東急、成田菊水ホテル、成田ビューホテル、成田ポートホテル、成田Uーシティホテル、ヒルトン成田、ホテル日航成田、ホリデイ・イン東武成田、マロウドインターナショナルホテル成田、メルキュールホテル成田、ラディソンホテル成田。

- 9) コンベンションホテル全15施設の平均値である。
- 10) 旅行ガイドブック『Lonely Planet JAPAN』（10版、2007年刊）に掲載された旅館2軒では、例外的に外国人が宿泊客全体の3割程度を占めている。外国人宿泊客は、北アメリカおよびヨーロッパから個人旅行者が多い。
- 11) 金（2009b）、『中国人だけ観光万来』（朝日新聞夕刊、2009年6月5日付）、および聞き取り調査による。このほかの中国人旅行者の行動パターンとして、北海道ルート、九州ルートなどがみられる（金、2009b）。
- 12) フライトクルーの行動時間は他の宿泊客と異なるため、ホテルではフライトクルーと他の宿泊客の客室を離すことが多い。
- 13) フライトクルー専用の談話室やフィットネスクラブを併設するホテルもみられた。
- 14) 多くのホテルが2週間前後の駐車無料サービスを実施している。
- 15) 中小規模の旅館による訪日外国人旅行者の受け入れを図る相互送客組織として1984年に発足した。加盟旅館による共同プロモーション活動が行われている。
- 16) (財)国際観光サービスセンターが中小規模の旅館やホテルなど外国人旅行者の受け入れに積極的な施設を対象に提供している予約支援サービスであり、1991年に開始された。外国人旅行者に向けた無料の情報提供も行っている。
- 17) 東南アジア系のフライトクルーは夜のフライトが多いため午後に来店するのに対し、昼のフライトである欧米系のフライトクルーは午前に来店する傾向があるという（イオンモールへの聞き取り調査による）。
- 18) 成田市内にはレトロバス（成田市観光巡回バス）の運行もあるが、外国人による利用は少ない（成田市観光プロモーション課への聞き取り調査による）。その要因として、コンベンションホテルにバス停を設けていないことや、片道運賃が200円であることなどが考えられる。
- 19) ユアエルム成田店は、イトーヨーカドー成田店をはじめ、100円ショップ、ドラッグストアなどの約75店舗からなる。
- 20) イオンモールが実施した買物客へのアンケート（2008年7月）による。
- 21) 最高20～30ドルまでの両替に制限されている。

【文 献】

- 大木美佳（2006）：成田門前町表参道商店街における外国人観光客の誘致。地理学研究報告，**17**，88-90。
観光庁（2008）『宿泊旅行統計調査』観光庁。
- 岐部 武・原祥隆（2006）：『やさしい国際観光』財団法人国際観光サービスセンター。
- 金 玉実（2009a）：地方におけるインバウンド観光の進展－長野県を事例に－。地域研究年報，**31**，77-86。
- 金 玉実（2009b）：日本における中国人旅行者行動の空間的特徴。地理学評論，**82**，332-345。
- 河野幸代（1999）：成田空港への交通変化と空港周辺施設の現状。地理学研究報告，**10**，64-66。
国際観光振興機構（2008）：『JNTO 訪日旅行誘致ハンドブック（総合編）』国際観光振興機構。
- 小松 牧・中山 徹（2007）：奈良市における訪日外国人旅行者の旅行背景・意識・行動の実態。日本家政学会誌，**58**，343-355。
- 清水伊織（2007）：中国人の訪日旅行の形態とその変化。地理学論集，**82**，37-52。
- 清水伊織・祖田亮次（2005）：北海道におけるアジアからのインバウンドツーリズム。北海道地理，**80**，25-39。
- 進藤敦丸（1999）：『観光行政と政策』明現社。
- 鈴木 勝（2002）：中国における海外パッケージ・ツアーの現況と日中ツアー比較試論。総合観光研究，**1**，163-169。
- 千 相哲（1999）：東アジアにおける国際観光と隣国間の観光流動。九州産業大学商経論叢，**40**(3)，297-316。

- 千 相哲 (2001) : インバウンドとアウトバウンドからみる国際化. 九州産業大学商経論叢, **42**(3), 137-157.
- 社 国慶・劉 慧 (2006) : 東京を訪れる中国人観光者訪問先の空間分析. 日本観光研究学会第21回全国大会論文集, 53-56.
- トラベルマネジメント (2001) : 『旅行業入門』トラベルマネジメント.
- 成田国際空港株式会社 (2008) 『成田空港～その役割と現状～』成田国際空港株式会社.
- 日本政府観光局編 (2009) 『国際観光白書2009』日本政府観光局.
- 林 さつき (1994) : 成田空港開港に伴う周辺地域の変容, 地理学研究報告, **5**, 31-33.
- 堀川真知子 (2000) : 訪日観光客訪問地分析を通して日本を見る. お茶の水地理, **41**, 25-33.
- 宮崎裕次 (2005) : 『成田市新空港自動車道沿いにおける駐車場の拡大過程』筑波大学第一学群自然科学類卒業論文.
- 山口康史 (2008) : 庄内地域における外国人旅行者の満足度について - 庄内空港チャーター便ツアー客を対象に -. 季刊地理学, **60**, 109-113.
- 劉 明 (2002) : 中国人の訪日旅行増加のための提言. 総合観光研究, **1**, 53-62.
- 劉 明 (2007) : 長崎県における上海人のインセンティブツアーについて - マーケティングの視点から -. 総合観光研究, **6**, 59-66.
- ロー, C. M. 著, 内藤嘉昭訳 (1997) 『アーバン・ツーリズム』近代文芸社. Law, C. M. 1993. *Urban Tourism: Attracting Visitor to Large Cities*. New York, Mansell.

筑波大学大学院 生命環境科学研究科 地球環境科学専攻
人文地理学研究室 成田地域調査 観光グループ
教授 山下清海
大学院生 鈴木富之 中村文宣
池田真利子 福田綾

アンケート調査の実施について（お願い）

この度、人文地理学野外実験にて実施する「成田空港周辺地域における宿泊施設を対象としたアンケート調査」にご理解いただき、感謝申し上げます。つきましては、目的及び内容についてご確認いただき、皆様の御協力を賜りたいと考えております。

ご多忙の中、誠に恐縮ですが、何卒よろしくごお願い申し上げます。

記

[調査目的]

成田市を事例に空港周辺に立地する観光産業の展開について、その特性を明らかにする。

[調査方法]

調査用紙（記入式）を用いたアンケート調査（同封している別冊子）

***記入例（このプリントの次ページから）を参考に記入下さい。**

[調査日程]

アンケートの回収：5月29日（金）

***観光グループのメンバーが直接お伺いし、回収させていただきます。**

[調査結果の公表]

人文地理学分野発行（2010年3月発刊予定）の「地域研究年報」にて研究結果を公表致します。調査で得られた情報につきましては、論文作成以外の用途に使用されることはありません。なお、個人・団体が特定される形での記述及びデータの使用は一切ございません。

[連絡先]

不明な点がございましたら、お手数ですが下記連絡先まで御連絡下さい。

〒305-8572 茨城県つくば市天王台 1-1-1 総合研究棟 A
生命環境科学研究科 地球環境科学専攻 人文地理学研究室
グループ代表：鈴木富之 ○○○-○○○○-○○○○

以上

成田空港周辺地域における宿泊施設を対象としたアンケート調査

- * アンケートは次ページから始まります
- * 別紙の記入例を参考にご記入下さい



生命環境科学研究科 地球環境科学専攻 人文地理学研究室
成田地域調査 観光グループ

* 貴施設の名称をご記入下さい。 施設名称：[]

問1. 経営に関する項目をお聞きます。

1) 開業した年（または業務継承した年）をお答え下さい。 [] 年

2) 現在の経営主体について、お答え下さい。

資本：(企業名) [] (国内資本 ・ 海外資本) (いずれかに○)

本来業務：(企業名) []

3) これまでに経営主体が替わったことがありますか。(ある ・ ない) (いずれかに○)

「ある」とお答えいただいた場合は、その変遷をご記入下さい。

施設名称：[] 経営期間：[] 年～[] 年

施設名称：[] 経営期間：[] 年～[] 年

施設名称：[] 経営期間：[] 年～[] 年

4) 土地及び建物の所有について、お答え下さい。

土地：(自社所有 ・ 賃借) 貸主の所在地：[] 市・区・町・村

建物：(自社所有 ・ 賃借) 貸主の所在地：[] 市・区・町・村

5) 施設の運営形態について、あてはまるものをお選び下さい。

(直営 ・ フランチャイズ ・ 運営受託) (いずれかに○)

6) 収入比率について、お答え下さい。

宿泊利用：その他の利用：テナント収入＝[]：[]：[]

問2. 施設に関する項目をお聞きます。

1) これまでに施設の改修を行ったことはありますか。(ある ・ ない) (いずれかに○)

「ある」とお答えいただいた場合は、その履歴をご記入下さい。

時期：[] 年 (改築 ・ 増築 ・ 改装) 内容：[]

時期：[] 年 (改築 ・ 増築 ・ 改装) 内容：[]

時期：[] 年 (改築 ・ 増築 ・ 改装) 内容：[]

時期：[] 年 (改築 ・ 増築 ・ 改装) 内容：[]

時期：[] 年 (改築 ・ 増築 ・ 改装) 内容：[]

問3. 利用者に関する項目をお聞きます。

1) 年間宿泊客数及び客室稼働率について、お答え下さい。

年間宿泊者数：[] 人 年間客室稼働率：[] %

2) 繁忙期の宿泊客数及び客室稼働率について、お答え下さい。

繁忙期：[] 月 宿泊者数：[] 客室稼働率：[] %

3) 閑散期の宿泊客数及び客室稼働率について、お答え下さい。

閑散期：[] 月 宿泊者数：[] 客室稼働率：[] %

4) 外国人宿泊客と日本人宿泊客の構成比をお答え下さい。

外国人宿泊客：日本人宿泊客＝[]：[]

5) 宿泊客の平均宿泊日数をお答え下さい。

宿泊客全体：[] 日 外国人宿泊客：[] 日 日本人宿泊客：[] 日

(問3つづき)

6) 日本人宿泊客について、お聞きします。

ア) 宿泊客数の多い上位3地域について、地域名とその割合をお答え下さい。

① 地域名：[] 日本人宿泊客数全体に占める割合 [] %

② 地域名：[] 日本人宿泊客数全体に占める割合 [] %

③ 地域名：[] 日本人宿泊客数全体に占める割合 [] %

イ) 宿泊客の利用目的について、その構成比をお答え下さい。

観光目的：ビジネス目的＝[]：[]

ウ) 「空港利用の前泊・後泊」を目的とした利用が、日本人宿泊客全体に占める割合をお答え下さい。

[] %

エ) 宿泊客の利用形態について、その構成比をお答え下さい。 個人客：団体客＝[]：[]

オ) 宿泊客の予約方法について、その構成比をお答え下さい。

電話やFAX、公式HPからの予約：宿泊予約サイトからの予約：旅行会社を介した予約

＝[]：[]：[]

7) 外国人宿泊客について、お聞きします。

ア) 宿泊客数の多い上位3カ国・地域について、国・地域名とその割合をお答え下さい。

① 国・地域名：[] 外国人宿泊客数全体に占める割合 [] %

② 国・地域名：[] 外国人宿泊客数全体に占める割合 [] %

③ 国・地域名：[] 外国人宿泊客数全体に占める割合 [] %

イ) 宿泊客の利用目的について、その構成比をお答え下さい。

観光目的：ビジネス目的＝[]：[]

ウ) 「空港のトランジット」を目的とした利用が、外国人宿泊客全体に占める割合をお答え下さい。

[] %

エ) 諸外国からの団体ツアー客を受け入れていますか。(いる ・ いない)

「いる」とお答えいただいた場合は、次の項目をお答え下さい。

a) 受け入れを開始した時期：[] 年

b) ツアー客の主な発地：(国・地域名) []

オ) 宿泊客の利用形態について、その構成比をお答え下さい。 個人客：団体客＝[]：[]

カ) 宿泊客の予約方法について、その構成比をお答え下さい。

電話やFAX、公式HPからの予約：宿泊予約サイトからの予約：旅行会社を介した予約

＝[]：[]：[]

8) 航空会社の乗務員による利用はありますか。(ある ・ ない)

「ある」とお答えいただいた場合は次の項目をお答え下さい。

ア) 利用している航空会社数：[] 社

イ) 主な航空会社：(会社名) []

9) 宿泊による利用以外について、お聞きします。

ア) ブライダルの年間実施件数及び利用者の居住地(商圏)をお答え下さい。

年間実施件数：[] 件 利用者の居住地：[]

10) 宴会・会議利用の年間実施件数及び主な利用者層や利用内容をお答え下さい。

年間実施件数：[] 件 利用者層・内容：[]

2008年〇月〇日

成田市経済部観光プロモーション課 堀越千里様

この度はお忙しい折、調査にご協力いただきまして誠にありがとうございます。2008年10月31日の成田市経済部観光プロモーション課 堀越千里様へのインタビューに向けての質問事項についてご連絡いたします。

私たちは、成田市の観光産業を大テーマとして、「臨空産業班」、「門前町班」の2班に分かれて調査してまいります。臨空産業班の研究の目的は「成田空港周辺や門前町周辺の観光産業（ホテル・駐車場等）がどのように発展を遂げたかについて、行政・空港・企業の取り組みや空港利用者の特徴から明らかにすること」です。一方、「門前町班」の研究の目的は「門前町が新勝寺や観光客との関わりによってどう変化してきたかについて考察すること」です。

そこで、堀越千里様より以下の点をご教授いただきたくお願い申し上げます。

- ①【成田市における観光の概要】 成田空港の建設により成田への観光客がどのように変化したかについてご教示いただけますようお願いいたします。経年的な比較の際のデータとしまして、観光客数、初詣客数、交通機関別来訪者数などの推移についてお教えいただきたく存じます。
- ②【観光地としての成田山新勝寺】 成田市の観光における新勝寺の重要性や、市と新勝寺との関係などをお聞かせいただきたく思います。また、参道の交通の整備や景観の保存など、新勝寺門前への事業などについて、ご教示賜りたく存じます。
- ③【観光プロモーション課の取り組みについて】 観光プロモーション課様は、いつ、どのような活動をされていますか。ご教授願います。
- ④【観光イベントについて】 成田市内の観光イベントは、いつ、だれが、どのように行っているかについてお教え願います。
- ⑤【外国人旅行者・トランジット客について】 成田市観光協会様では、どのような外国人旅行者対策を行っていますか。また、外国人旅行者がどのような行動をとっているか、どこを訪れるかについてご存知でしたらご教授願います。
- ⑥【ホテル・駐車場などの観光関連産業の現状】 成田市内のホテル・駐車場の歴史や現状についてお教えてください。また、ホテル・駐車場の組合や施設、観光関連の組織の紹介等をお願いします。なお、成田旅館組合とは、アポイントメントが取れています。
- ⑦【成田市を含めた広域観光について】 成田市は「国際観光モデル地区」に選定されておりますが、これに関して今までの経過と現状についてご教示をお願いいたします。また、レトロバスや観光バスなどの事業の経過と現状のご教授をお願いします。この他、広域観光への取り組みについてご存知でしたらお教えてください。

以上、お忙しいところ恐縮ですが、ご検討いただければと存じます。なお、当日の参加者は、3名（鈴木・長坂・西田）でお伺いいたします。また、お伺いする当日（10月31日）は宜しくをお願いいたします。

※ご不明な点がございましたら、お手数ですが、代表者鈴木富之(TEL:000-0000-0000)までご連絡をお願いいたします。

筑波大学大学院 生命環境科学研究科 地球環境科学専攻
鈴木富之、長坂幸俊（臨空産業班） 西田あゆみ（門前町班）
筑波大学 生命環境研究科 教授 田林 明、山下清海

【連絡先】

代表者：鈴木富之（院生）

携帯番号：000-0000-0000 住所：茨城県つくば市天王台1-1-1 総合研究棟A

滞在先：△△△旅館（TEL:00-0000、滞在期間:2008年10月26日～11月1日早朝）

2008年〇月〇日

成田市観光協会 御中

先日（10月24日）、聞き取り調査の依頼に関するお電話をさせていただきました筑波大学・院生の鈴木富之と申します。この度はお忙しい折、調査にご協力いただきまして誠にありがとうございます。

まず、観光協会様への聞き取り調査の質問事項についてご連絡いたします。私たちは、成田市の観光産業を大テーマとして、「臨空産業班」、「門前町班」の2班に分かれて調査してまいります。臨空産業班の研究の目的は「成田空港周辺や門前町周辺の観光産業（ホテル・駐車場等）がどのように発展を遂げたかについて、行政・空港・企業の取り組みや空港利用者の特徴から明らかにすること」です。一方、「門前町班」の研究の目的は「門前町が新勝寺との関わりや観光客との関わりによってどう変化してきたかについて考察すること」です。

そこで、成田市観光協会様より以下の点をご教授いただきたくお願い申し上げます。

- ①【成田市における観光の概要】 成田市の観光について、観光客数がどのように変化してきたかを説明いただきたく存じます。また、成田空港の建設以降の変化やそれに伴い行政やその他機関と、どのように連携を取って行ったかなど、対応策などをお聞かせいただきたく存じます。
- ②【門前町のハード面の整備】 参道の交通の整備や景観の保存など、新勝寺門前町におけるハード面の事業などについて、ご教示賜りたく存じます。
- ③【成田市観光協会の取り組みについて】 成田市観光協会様は、いつ、どのような活動をされていますか。ご教授願います。
- ④【観光イベントについて】 成田市内の観光イベントは、いつ、だれが、どのように行っていますかについてお教え願います。
- ⑤【外国人旅行者・トランジット客について】 成田観光協会様では、外国人旅行者対策にどのようなことを行っていますか。また、外国人旅行者がどのような行動をとっているか、どこを訪れるかについてご存知でしたらご教授願います。

つぎに、聞き取り調査の日程ですが、下記候補のうちのご都合のよい時間帯をお選びください。

①10月27日午前、②10月29日午前、③10月29日午後3:30、④10月30日午後、⑤10月31日午後

大変お手数ですが、代表者**鈴木富之(TEL:000-0000-0000)**までご連絡いただけるよう宜しくお願いいたします。以上、お忙しいところ恐縮ですが、ご検討いただければと存じます。なお、当日の参加者は、3名（鈴木・長坂・橋本）でお伺いいたします。

筑波大学大学院 生命環境科学研究科 地球環境科学専攻
鈴木富之、長坂幸俊（臨空産業班） 橋本暁子（門前町班）
筑波大学 生命環境研究科 教授 田林 明、山下清海

【連絡先】 代表者：鈴木富之（院生）

携帯番号：000-0000-0000 住所：茨城県つくば市天王台 1-1-1 総合研究棟 A318

滞在先：△△△旅館（TEL:00-0000、滞在期間:2008年10月26日～11月1日早朝）